

「子どもの学びの場」に関する一考察

－江戸川区子ども未来館を事例として－

A study on the place by the learning for children － A case of KODOMO-MIRAI-KAN in Edogawa City －

○ 上山 肇（法政大学大学院 政策創造研究科）

1. 問題の所在

近年、学校における子どもの教育や学校と地域との関わりといった観点で、地域と協働しながら子どもたちの豊かな成長を支え「地域とともにある学校づくり」を進める仕組みとしてコミュニティスクールがあるが、子どもの教育における地域との連携・協働のあり方をみると、学校以外での「学びの場」もその対象として考えることができる。

本稿では、公共施設として江戸川区が運営している「江戸川区子ども未来館」に着目し、取り組みの状況について子ども未来館職員にヒアリングするとともに、そこにおける自らのゼミでの実践を踏まえ、地域社会における「子どもの学びの場」の今後の可能性について、「協働」といった視点を踏まえ考察するものである。

ヒアリングは、子ども未来館職員 2 名に対して 2015 年 10 月 23 日と 2016 年 3 月 11 日に行った。子ども未来館での自らのゼミは、2014 年 6 月 1 日、2015 年 6 月 7 日、2016 年 5 月 1 日及び 6 月 5 日の 3 年間に渡り「川ゼミ」において実践している。

2. 江戸川区子ども未来館

2. 1 子ども未来館の特徴

本稿で対象としている「江戸川区子ども未来館」は、2010 年 4 月に旧図書館跡地を利用し子どもたちの探究活動の拠点基地として開設した施設で、アカデミー（学びの機会）とライブラリー（図書館）の二つの機能を合わせた新しいタイプの施設である。また、展示型の科学館や博物館とは異なり、区の自然や産業、人材等あらゆる地域資源を活用して体験しながら継続的に学べる機会を提供しており、江戸川区の「共育・協働」の理念のもと、区民講師やボランティア、専門家、専門機関と共に学校では行うことが難しい幅広い分野のプログラムを開発しながら運営しているところに特徴がある。

この施設の設置目的は、「子ども達の探究活動の拠点」と明確に示されており、その取り組みは、江戸川区ならではの地域資源（自然・産業・人材）をフルに活用したものとなっている。また、多くの専門家や専門機関と連携し、幅広い分野のテーマを専門的・継続的に体験しながら学ぶ機会を提供していて独自性にも富んでいる。この施設の最大の魅力は、わがまちを愛し人と人とのつながりを大切にする「共育・協働」の理念のもと、区民と行政が一体となって地域力を発揮し運営されているところにある。

2. 2 現在までの経緯

子ども未来館は開館から 7 年目を迎えたが、これまで未来館が実施した講座・教室数は

延べ3千回を超え、参加した子どもの数は延べ5万3千人にも及ぶ。未来館では、子どもたちの探究心を継続して持てるようなプログラム開発に努めており、その代表的な継続プログラムに「ゼミ」がある。この「ゼミ」は、科学や自然・歴史や文化など幅広いテーマを半年から1年間かけてより深く学ぶ講座である。

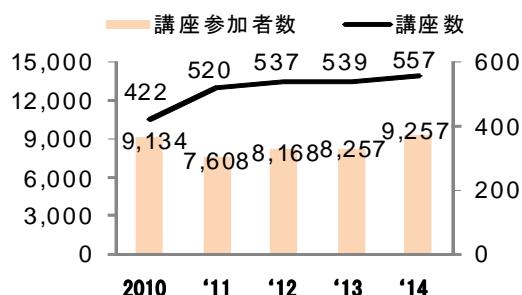


写真-1 子ども未来館全景 写真-2 大学での模擬法廷 図-1 講座数及び参加者の推移
(写真-1, 2 図-1 いずれも出典は「子ども未来館」)

3. 取り組みの成果

この取り組みによる成果については以下のこと挙げられる。

3. 1 子ども達の学習意欲の高まり

参加した子どもたちからの声からも自ら「学びたい」と意欲を持って集まってくる子ども達が増えていることがわかる。各講座の多くが事前申込制であるが、倍率は定員の2~3倍であり、人気の講座にいたっては10倍を超える応募がある。参加後は、「学校の成績が伸びた」「好きな学部の高校、大学に進めた」等の報告や、子ども未来館で学んだことを活かして、全国の各種コンクールで入賞を果たすといった実績の報告もある。

そして、未来館で学んだことや活動したことの経験から、小学校卒業後も中学生がボランティアで活躍し、自らの経験を活かし後輩の指導する子ども達が増えている。

3. 2 地域の団体や人々との「共育・協働」が拡大

年々、未来館の趣旨・コンセプトに賛同し講師やサポートを引き受ける地域団体、区民が増えている^{注1)}。地元中小企業関係では、若手技術者・経営者が集まった任意団体「江戸川で創る会」が講師となり、町工場の優れた技術や役割について工場見学や金属作品作製をする講座を実施している。こうしたことにより、子ども達は地域産業について学べる機会が得られ、同時に地元企業のPRにも繋がっている。

その他、ふるさとの歴史を子ども達に伝える活動をしている「葛西さざなみ会」(2011年 地域づくり総務大臣表彰受賞団体)を講師に迎え、「海苔すき」や「田んぼづくり」体験を通じた漁業・農業の文化と技術を次世代に伝える講座も続けている。

また、江戸川総合人生大学^{注2)}の卒業生もボランティアとして活躍している。

3. 3 大学・企業・NPO・公共機関等との連携が広がる

子ども未来館の趣旨・取組に賛同して、講師やサポートを引き受けるスペシャリスト(専門家)、専門機関(大学・企業・NPO・公共機関等)との連携も年々拡がり、質の高いプログラムを幅広く提供できている^{注3)}。また、大学講師や子ども未来館、江戸川区の関連部署による共同研究も実施している^{注4)}。

3. 4 区内の小学校・中学校・高等学校との良好な関係

区内73校の小学校と連携し、総合学習の授業や不登校児童学級の受け入れや、未来館で体験学習を実施し小学校へ出向き出前授業を行うなど良好な関係を構築している。また、

中学生の職場体験（区内中学校全 33 校で必須）や区内都立高校生の奉仕体験（江戸川、葛西工業）受け入れ、ロボット講座への協力などを通じ世代間交流にも役立っている。

3. 5 注目を集める独自のプログラムと取り組み

未来館の多彩なプログラムの中で、法律ゼミにおける「憲法・刑法・民法」については、小学生対象の法教育実践例として大きな注目を浴び、2012 年度の実践例が書籍化された。2014 年度ゼミの「目指せ！CMプランナー」では、テレビCM作成のプロと地元農家の方々の指導のもと、子ども達のアイデアで区特産の小松菜をPRするCMを制作した。

また毎年、全国の自治体等の視察を受け入れており、地域資源を最大限に活用した独自の取り組みが注目されている。

3. 6 他の図書館には無い先進的な取り組み

アカデミーと連携した取り組みとして、各講座の時間中に図書館の司書が講座内容に関連する参考図書を紹介し、その場で貸し出しをしていて、子ども達の調べ学習に直接繋がっている。

また、篠崎子ども図書館ならではの理知活動（講演会・低年齢児向け科学教室やお話し会）の参加者が増えている。特に「ぬいぐるみのお泊り会」は、幼いころから図書館に興味を持たせる人気のイベントとして大きな注目を浴び、2014年に同館をモデルに絵本化された。



写真-3 図書館からの関連図書の紹介と貸出(2016. 6. 5 筆者撮影)

4. 川ゼミでの実践

子ども未来館の事業に3年間「川ゼミ」という形で関わったことから、その状況について下記にまとめた。この取り組みにより以下のことが成果として挙げられる。

4. 1 2014 年度

- ① 実施日：2014年6月1日（日）
- ② テーマ：「親水公園のある“まち”を研究しよう！」
- ③ 内容と成果：a. フィールドワークを通して江戸川区の水辺について知り、水辺の整備（親水公園・親水緑道整備）の効用（景観、コミュニティ、防災等）に気づくことができた。b. 子どもたちが自分の住むまちについて考えることができるようになった。c. 問題・課題を発見し、改善策や新たな提案を“創造”できるようになった。

4. 2 2015 年度

- ① 実施日：2015年6月7日（日）
- ② テーマ：「親水公園・親水緑道めぐり」
- ③ 内容と成果：江戸川区全域の水辺のまちづくり（親水公園、親水河川、スーパー堤防等）についてバスで視察し、子どもたちは水辺の都市空間を実感できた。

4. 3 2016 年度

- ① 実施日：2016年5月1日（日）、6月5日（日）
- ② テーマ：「物を見る目、川を見る目」
- ③ 内容と成果：川のある“まち”の見方・調べ方と川のもつ機能について、江戸川を事例に水辺にある都市空間を視察しながら学ぶことができた。

2016 年度「川ゼミ（6/5）」の様子



写真-4（左）江戸川区水門（河口堰）にて国土交通省より説明を受ける子どもたち

写真-5（中）江戸川河川敷の小岩菖蒲園での観察

写真-6（右）市民ボランティアを囲んでのグループワーク（いずれも筆者撮影）

5. おわりに

今回、江戸川区子ども未来館を事例に職員へのヒアリングを実施し、実際に「川ゼミ」を運営することにより、この施設と事業とが「子どもの学びの場」として次のような成果を生んでいることがわかった。

- ① “学びの場”としての効果：学校だけでなく地域との連携によって、子どもたちの学習意欲が向上していることから、子どもたちにとって“学びの場”としての効果をもたらしていること
- ② “学び場”を通じた地域との連携による協働の実現：ボランティアや地域の方々との連携・協力によってこの施設は運営されており、子どもたちの“学びの場”を通じた協働の姿が実現できていること
- ③ ボランティアの活躍とその効果：市民（区民）がボランティアとして生き生きと働ける場となっているだけでなく、ここでは実際にボランティアの果たす役割が大きく、ボランティアの関わり方によって子どもの理解度も変わること

また、今後の課題としては以下のようなことが挙げられる。

- ① 持続性のあるプログラムの提供とボランティアの育成：講師やボランティア等の新たな人材を発掘しながら、各機関・団体等との共催・協働事業などの連携を更に拡大し、子どもの知的好奇心や興味・関心を引き出す質の高い充実したプログラムを継続して提供していくことの必要性とボランティア育成の必要性
- ② 学びの場・協働の場としての評価：今までの実績も含め評価することの必要性
例えば、ゼミを修了した子どもたちの、その後の進路等実態調査等が挙げられる。

注釈

注1) 講師・ボランティア登録者数は262名（2014年度末）。内訳は、町会長、青少年委員、民生委員、行政書士、農家、町工場、伝統工芸士など多数。

注2) 2004年に地域貢献を志す人々を応援するため、区が設立した「共育・協働」の学びの場。さまざまな知識や経験を持つ方々が年齢を超えて学んでいる。学校教育法で定める正規の大学ではない。

注3) 2015年度ゼミ講師：露木和男（早稲田大学）、上山肇（法政大学）、木村雄一（日本大学）、紀伊国屋書店、（独）産業技術総合研究所、NPO法人チームいただきます 他。

注4) 「江戸川区のカエル研究」慶応大学 戸金先生、「ヤマトシジミの成長研究」戸板女子短大 橋詰先生など。研究成果は共同名義で提出・発表予定、同時に子ども未来館の講座にも活用される。